

海外スキー学校の旅あれこれ

国内のスキー学校ツアー

1950年代後半、社でも国内のスキー学校のツアーがかなり組まれた。スキーの指導は、正規の指導員養成講習を経て、指導員ないし準指導員の資格を持っていないと教えることはできない。この資格を持っている人に頼んでツアーに同行してもらわなければならない。これらの方々は別に本業を持っておられるので、ツアーの期間中、個人的に休暇をらなければならない。当時は、スキー場の地元の方々でも正規に資格をもった方が少なかったという状況であった。

スキー指導員養成

そこで、社としても社員の中から指導員になる人材を確保しなければならなくなった。そこで社報で募ることにした、残念ながら私はそれを知らずに応募しそびれた。約20人近くが養成員となって、上越線の石打等で1回が1週間程度の「業務として」のスキーをすることとなった。

ところがそれらのメンバーが「係長」の職位に迫っていることと、現地のスキー場の中からも有資格者が続出したので、実際には社員の有資格者が教える機会が失われた。

鈴木正彦先輩

社の指導員養成の推進者として、鈴木正彦先輩がその任に当たっておられた。私個人は話もしたことがない先輩でしたが、今回の私の海外スキー学校の話が伝わったのか、鈴木正彦先輩から私に話が持ち込まれた。それは、ザンクト・クリストフに行く手前のキッツビューヘルの駅で、その近くに住んでおられるお嬢さんに和服一式のスーツケースを渡して貰えないかとの頼みごとであった。

当時の航空機では、無料での持ち込み荷物制限が、エコノミークラスでは20kg、ファーストクラスでは30kgであったが、ソ連国内では50kgであった。ヨーロッパ内での列車の中では重量制限はなかったと思う。私は超過手荷物料金は支払っていない。

クルッケンハウザー教授

当時の日本でもよく知られたスキーの「レジェンド」でもあられた。ティロール州の州都インスブルックの大学教授でもあり、その近くにあるザンクト・アントンとザンクト・クリストフはスキーの「メッカ」として知られていた。しかし、先生は年齢的なこともあり、ご本人が直接教えるのではなく、そのグループの一員であるハオアイス氏とその部下が指導することになった。

スキー学校での卒業

ザンクト・クリストフでのスキー学校では、学習の終了時には修了証書を渡されることになっていた。そのサンプルは後段に掲載したのそれである。その証書は幾つかの手書きのよる記載事項は以外印刷されたものであるが、受講生からその用紙はJTBが作成・印刷しとものだと図星をさされてしまった。

セガンティーニ美術館

サン・モリッツ滞在中、市内にあるイタリアの画家セガンティーニ美術館に行ってみた。今ではそのときの具体的な印象は残っていないが、感銘を覚えたものであった。

ノイシュヴァンシュタイン城とリンデルホーフ城

確か、インスブルック市内に住んでいた、上述の鈴木先輩の息子さんが事前に私に接触されてきていたので、マイクロバスだったか、手配してもらったことだったと思う。この2つの城のことは、以前から個人的に詳しく調べていたので、鈴木さんの同行もガイドの同行もなく実施できた。